

青年の内的作業モデルに関する研究

— 内省自己との関連から —

佐々木 靖 子

I 問題と目的

内的作業モデル (IWM) とは、発達過程における愛着対象との相互作用的な経験の反復から形成された、自己や他者についての表象モデルであり (Bowlby, 1973), 外的世界を予測し関連づけるために用いられる。中でも、愛着に関する IWM が特に重要とされ、「愛着に関する情報の組織化における意識的および無意識的ルール」「愛着に関連する経験、感情、観念に関する情報探索を制御するルール (Main, 1985)」と定義されている。

IWM の実証研究では、幼児期には観察・実験、児童期には投影的手法などが開発され、青年期以降には半構造化面接の Adult Attachment Interview (AAI) が用いられている。AAI とは、幼少期の愛着対象との思い出を尋ね、語られる内容だけでなく話の一貫性や面接態度も分析の対象として、安定型や不安定型など個人をいくつかのタイプに分ける面接方法である。

ところで、IWM は基本的には時間的に安定性しており、幼少期と青年・成人期における個人の愛着スタイルや愛着表象には対応性があるとされている。そこで、本研究では母親の評定による幼少期の愛着行動と現在の AAI との関連性について取り上げたい。次に、愛着に関する IWM は対人的な情報処理に関わるとされることから、AAI と対人関係についての認識との関連を調べたい。

また、IWM については一定の安定性が確認されているものの、必ずしも幼少期の体験だけで固定されるものではなく、個人の発達や社会環境によって変化を遂げることが予想される。Fonagy (1991) は、養育に対する母親の感受性に AAI の分類だけでなく、面接過程で自己や他者の感情や考えに触れる reflective self が重要であることを明らかにした。そこで、本研究では、reflective self を内省自己という概念に置き換え、愛着対象だけでなく対人関係全般の「自己や他者の心的状態について関心を持ち理解する能力」と定義づける。そして、内省自己が AAI のタイプや幼少期から青年期の IWM の変容にどの程度関与するかについて調べたい。これらのことから、仮説は以下のようにまとめられる。

仮説 1 乳幼児期の愛着行動は、青年期の IWM とある程度関連する。

仮説 2 IWM が安定型の青年は、不安定型の青年と比

べて、対人関係の認識が肯定的である。

仮説 3 IWM が安定型の青年は、不安定型の青年と比べて、内省自己が高い。

仮説 4 乳幼児期の愛着行動から青年期の IWM の変化には内省自己が関与する。

II 研究 1

目的：「内省自己尺度」の作成および信頼性の検討を行う。さらに、「対人関係における自己と他者についての認識尺度(対人関係の認識尺度)」の尺度構成を確認する。
方法：〈被調査者〉大学生81名(男子54名・女子27名)〈質問紙〉①私的自己意識尺度(菅原, 1984), 内的他者意識尺度(辻, 1993), 視点取得尺度(丸山ら, 1990; 弓削ら, 1990), 他者の表出行動に対する感受性尺度(石原ら, 1992)の4尺度を原尺度とする内省自己尺度(5件法)②対人関係の認識尺度(6件法)(戸田, 1988)

結果と考察：内省自己尺度についての因子分析の結果、27項目から3因子が得られた。第1因子は他者の考えの理解や感情の知覚に努める項目からなり、第2因子は他者の考えや感情を、表情・態度や声の調子などの非言語的行動から読み取ろうとする項目からなり、第3因子は自己を振り返り内的側面について意識する項目から構成されたため、それぞれ他者理解・他者読心・自己内省と命名した。各因子の α 係数は.80~.90と、一定の信頼性が確認された。

また、対人関係の認識尺度についての因子分析の結果、20項目から3因子が得られ、それぞれ親和性($\alpha = .87$)・対人不安($\alpha = .71$)・対人回避($\alpha = .72$)と命名された。因子構造は、詫摩・戸田(1988)・戸田(1988)・久保田(1995)とほぼ一致していた。

男子よりも女子の方が、内省自己尺度の自己内省得点、対人関係の認識尺度の親和性得点が有意に高かった。

III 研究 2

目的：愛着に関する IWM と、幼少期の愛着行動および対人関係についての認識との関連を調べる。また、AAI のタイプ、および愛着行動と AAI の組み合わせに内省自己が果たす役割を調べる。

方法：〈青年の面接・調査〉大学生・短大生35名(男子

16名・女子19名)を対象に、AAI (Main, 1996) を実施した。後日、内省自己尺度と対人関係の認識尺度から構成される質問紙を郵送した(回答者30名)。

〈母親の調査〉面接対象者の母親に愛着行動尺度(岩樋, 1995)から構成される質問紙を郵送した(回答者31名)。愛着行動尺度は、母親との距離・扱いにくさ・母親との安定性の3尺度が含まれる。

結果と考察：AAIの逐語記録・発語時間から Grossmann (1989) に従って評定し、若干の変更を加えて分析を行った。評定者間の一致率は48.3~90.0%だった。分析の結果、面接者は安定型・不安定型の2タイプ、さらに安定型は肯定型もしくは回想型、不安定型は防衛型もしくは抑圧型の4つの下位タイプに分けられた。AAIの性別および現在の住居による関連はなかった。しかし、子どもの就学前の母親の就業の有無がAAIタイプと有意な連関がみいだされた。

質問紙で測定された各尺度の総合得点を算出するために、各下位尺度に主成分分析を行い、対人関係の認識と内省自己は第1主成分得点、愛着行動は第2主成分得点を採用した。

次に、AAIのタイプごとの愛着行動の総合得点に有意な差がみられず、愛着行動とAAIタイプの組み合わせに内省自己は関連しなかったため、仮説1と仮説4は支持されなかった。この理由として、愛着行動の母親との距離得点が防衛型より回想型で有意に高かったことから、現在の子どもの関係が、過去の子どもに対する母親の表象に影響を及ぼしている可能性が考えられた。

また、AAIタイプと対人関係の認識、および内省自己尺度との関連を調べた。AAIタイプ(2)×性(2)の2要因で各尺度について分散分析を行ったところ、対人関係の認識では、総合得点・親和性で女子において不安定型より安定型の方が有意に高く、対人不安で有意に低かった。女子については仮説2が支持された。先行研究では、女子より男子の方が影響に敏感であるとする研究(佐藤, 1993)や、男子の方が幼少時の愛着関係よりも社会的経験の中から否定的な影響を受けやすいとする研究(Skolnick, 1985)などがあり、その結果は一義的にとらえにくい。また、今までの研究ではAAIと他変数との関連における性差はあまり問題とされていないため、

今後の課題だと考えられた。

また、内省自己では、他者理解のみ女子において不安定型より安定型の方が有意に高かったが、他では有意差がなかった。仮説3は女子の他者理解においてのみ支持され、全体としては支持されなかった。女子については、AAIのタイプを他者視点取得の能力の視点から考察した van Ijzendoorn et al (1995) と類似した結果が得られた。

本研究からは、内省自己と対人関係の認識において男子より女子の方がIWMとより強く関連することがみいだされた。

IV 研究3

目的：AAIおよび質問紙の回答から、AAIタイプの特徴をとらえる。(ここでは、事例検討は省略し逐語による検討のみ取り上げた。)

逐語の検討と考察：

①対人関係の認識；安定型では、両親や友人関係にかかわらず現在の良好な対人関係に言及する人が多く、不安定型では、過去の対人関係を否定的に振り返ったり、対人関係について親から否定的な影響があったと述べる人が多かった。また、人との出会いによって親との関係が変化してきたと述べる人もいた。

②内省自己；安定型にreflective selfにあてはまる発言が多かった。しかし、不安定型でもreflective selfのカテゴリーにあてはまるが過敏ともいわれるような対人知覚がいくつかみいだされた。

③想像された子どもへの態度；安定型には、子どもに対して他者への配慮ができることや、親となった自分の子育てや性格について、子どもなりに考え直したり子ども自身の子育てに生かすことを望む人が多く、思い入れの強さや自我関与が感じられた。不安定型には結婚や育児に対して否定的に考える人が多かった。

V 総合考察

本研究では、IWMと対人関係の認識および内省自己との間に一定の関連が得られたが、一方を規定因とするより、過去の体験とその意味づけ、現在の状況が相互に作用していると考えの方が適当だと思われた。